

# 人権作文コンテスト

## 入賞作品

### 『言葉は心にのこる』

加茂小学校5年 本谷 健人さん



ぼくはある日お姉ちゃんとケンカをしました。カツとなつたお姉ちゃんは、突然「死ね」と言つてきました。お母さんが「今何で言つた？」と言いながら近くにきました。お母さんは、とても悲しい顔をして泣いていました。泣きながら、お姉ちゃんをしかっていました。

お母さんは「その言葉は、人の心を深くきずつけるし、言われた人がすこと覚えているし、その人を大切に思つている人達まで悲しませてしまふんやで」と言つていました。

言われたぼくは悲しかつたけど、「ぼくの事を大切に思つてくれている人達まで悲しませてしまふの言葉があるんだなと知りました。

お母さんは、「ぼくとお姉ちゃんと」「あなた達がその言葉を言つ人にはなつてほしくない」と話してくれました。

その言葉を聞いて「死ね」という言葉は、ただおこつた気持ちをぶつける言葉ではなく、人の心に大きなきずを残す言葉だということを知りました。

紙にむかつてひどい言葉を言しながら、えんぴつで穴をあけました。ぐしゃと丸めて、ごめんなさいとあやまりました。その紙を広げても穴はふさがりません。言われた人は、いいよつて言つてくれても、そのきずは、薬や、ばんそうじうではなおせないし、一生のきずになる事をお母さんが教えてくれました。お母さんが泣いたのは、「ぼくを守るためにじやなくて、お姉ちゃんがそんな軽い気持ちで使つてしまつた事が悲しかつたんだろうな」と思いました。



### 『万博でのバリアフリー』

多田中学校2年 熊本 のどかさん

言葉は目に見えないけど、心に深くのこります。悪い言葉は心を暗くします。いい言葉は人を笑顔にします。だからぼくは、人をおとすような言葉ではなく、「元気」にする言葉を選びたいと思います。お母さんが泣いたあの口を忘れずに、やさしい言葉を使える人になりたいです。ぼくのまわりの人達が安心して語せるようにしたいです。

夏休みを利用して、私と母と妹の3人で、大阪・関西万博に行きました。その時感じたバリアフリーについて書きたいと思います。母は、線維筋痛症という病気を患つておらず、長時間の歩行や列に並ぶのは負担になります。杖を使用しました。どのパビリオンから回るのか、休憩や食事場所はどこにするかなと、3人で話し合いながら決めました。計画を立てる時間も、私にとっては、初めての万博といふこともあり、とてもワクワクする楽しい時間となりました。

会場に到着すると、入口で係員の方が母に気付き、優先ゲートに案内してくれました。スマートに入場できたことにとても安心し、心中で「こういう配慮があると、体が不由人も楽しめるな」と感じました。

会場内を回ると、多くの海外のパビリオンは、細かい配慮が行き届いていました。妊婦さんや障がいがある人、サポートが必要な人でも安心して見学できる優先レーンがあり、誰もが快適に楽しめるよう工夫されていました。車椅子でも体験できるコーナーや、列の流れを調整する案内など、細部にわたる配慮に驚きました。母も笑顔で「こういう工夫があると利用しやすくていいね。」と話してくれました。

一方、日本のパビリオンでは、まだ十分な配慮が行き届いていないと感じる場面が多くありました。優先レーンを設けていない日本パビリオンも多く、優先レーンがあつても、杖をついている母と介助者である私の2名までなどという人数制限がありました。

とある日本のパビリオンを訪れた際、日本のバリアフリーの遅れについて、実感する出来事がありました。そのパビリオンは、優先レーンで予約していたこともあり、とてもスマートに入場できました。パビリオン内にも優先レーンがあり、人が多くてもこれなら母も安全だなと思っていました。しかし、優先レーンは看板とテープの柵が所々にあるだけなので、元気な子供が母の横を勢いよく走り抜けるなど危ない場面がありました。近くにスタッフさんの案内もなく、転倒の恐れもあるので、足早にそのパビリオンから退出しました。

世界中から様々な人が集まる万博だからこそ、誰もが楽しめる工夫がさらに広がるとい

### 『ワンワールド・ワンプライネット』

陽明小学校3年 橋本 航さん



ぼくは夏休みに、大きめで開きやされている大さか・関西万博の2回、家近くで行きました。はじめていつた時は、たくさんいろいろな形のたて物や、田の石や、人が作った細工で作られた動く心ぞうを見て、すこし涙を落としたと思います。そしてミヤクミヤクといつしょに手しきりをつたりしてとても楽しかつたです。

2回目に行った時に、お母さんに「ここを見よ。」

と言われ、ウクライナのパビリオンを見ました。そこはコモンズという、いろんな国の人たちが集まっているところでしたが、ウクライナは他の国より、とてもなりんどい人が多かったです。たくさんの人が気になつて居たんだと思いました。そこでは今のウクライナのえいぞうを見ました。いつ落ちてくるかわからないばくだんにヒヤヒヤしながら、毎日をすごしていました。学校のまどガラスがばくだんでわらわれて使えなくなつて、地下を走る電車のえきでべん強をしているウクライナの人たちのえいぞうでした。ぼくはいよいよつらめませんでした。「ぼくのすゞ」といふ毎日とは全ぜんちがつたからです。「でもこれは本当のことなんだよ。」

そして、ほかにも今、ウクライナのようじせんそうをしているパレスチナという国のパビリオンも見ました。

「パレスチナのガザ地区という場所が大きなひがいをうけてるんだよ。」

と、お父さんが言つていました。ぼくはウクライナのパビリオンを見とおどろいていたのですが、どんなパビリオンなのかなと少しわい気持ででした。でも、行ってみるとせんそつのことはまったく感じられませんでした。ぼくたちは日本人にとって、パレスチナというガザ地区、ガザ地区というとせんそうというイメージが強いので、わざとそういうことを思われるてんじはしていないとパビリオンの人が言つていました。せんそうによつて人々のい動がとてもむずかしくて万ばく開く初日には、てんじ物が何もどぞかなかつたそうです。ぼくにとって、この震の万ばくは、楽しいだけではなく、せんそうにつづつわかるきっかけになりました。

になりました。今まで考えたことはなかつたけれど、今も世界ではせんそうがおきているんだと強く感じました。この大きな大屋ねりングの中では、どの国もたたかわないので、パビリオンの人も、パビリオンに来る人もみんな楽しそうでした。本当の世界でも、どの国に住んでいる人もみんな樂しく毎日をすごせたらいいなと思いました。

帰る前に見たドローンショード、「ワンワールド・ワンプライネット」という文字が空にかびました。次の日に、その言葉の意味を調べました。「ひとつの世界、ひとつのわく星で、みんなが同じ空を見上げて、同じねがいをきよう有する」というメッセージがこめられていました。ぱくだんにビクビクしながらみるねずみ色の空じゃない、みんなが世界の平和といつ同じねがいを持つて見上げるきれいな空になつてほしかなと思いました。



今年度も多くの小・中学生の皆さんから、ご応募いただきました。  
その中から入賞されました3作品をご紹介します。